

表 10 夫の合計家事・育児時間（休日、平日含む）に対する重回帰分析（第 1 回）（n=3545）

調整済み R²=0.121

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	-48.211	29.534		-1.632	.103
	A011 出生年月(年)H1	3.402	.617	.088	5.513	.000
	a022b 親同居有無H1	5.147	4.295	.019	1.198	.231
	a024a 就学前子ども数H1	45.319	2.478	.300	18.291	.000
	seishoku 妻 正規職員	-6.938	9.230	-.019	-.752	.452
	parttime 妻 パート等	-16.677	7.155	-.054	-2.331	.020
	jiei 妻 自営業等	1.304	10.202	.002	.128	.898
	f1wk 1回 女性仕事時間 合計<分>	.009	.015	.017	.603	.546
	m1wk 1回 男性仕事時間 合計<分>	-.045	.009	-.079	-4.933	.000
	Wkajieq 家事責任に対す る妻の意識 1=夫婦同等	9.168	4.431	.036	2.069	.039
	Hkajieq 家事責任に対す る夫の意識 1=夫婦同等	29.208	4.692	.106	6.225	.000

a. 従属変数: m1hw

表 11 妻と夫の合計家事・育児時間の差に対する重回帰分析（第 1 回）
(n=3420)

調整済み R²=0.359

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	347.577	62.740		5.540	.000
	A011 出生年月(年)H1	1.082	1.312	.011	.825	.409
	a022b 親同居有無H1	-9.605	9.192	-.014	-1.045	.296
	a024a 就学前子ども数H1	107.779	5.294	.290	20.360	.000
	seishoku 妻 正規職員	-134.708	19.808	-.153	-6.801	.000
	parttime 妻 パート等	-78.138	15.342	-.102	-5.093	.000
	jiei 妻 自営業等	-45.923	21.841	-.034	-2.103	.036
	f1wk 1回 女性仕事時間 合計<分>	-.364	.033	-.277	-11.124	.000
	m1wk 1回 男性仕事時間 合計<分>	.094	.019	.067	4.836	.000
	Wkajieq 家事責任に対す る妻の意識 1=夫婦同等	-5.481	9.458	-.009	-.580	.562
	Hkajieq 家事責任に対す る夫の意識 1=夫婦同等	-57.574	10.026	-.085	-5.743	.000

a. 従属変数: D1hw 家事時間合計<夫妻の差>

表 12 妻の平日一日あたりの家事・育児時間に対する重回帰分析（第 1 回）
(n=3561)

調整済み R²=0.467

係数 ^a						
モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	258.522	62.356		4.146	.000
	A011 出生年月(年)H1	5.585	1.303	.053	4.286	.000
	a022b 親同居有無H1	-15.333	9.141	-.021	-1.677	.094
	a024a 就学前子ども数H1	143.905	5.250	.349	27.412	.000
	seishoku 妻 正規職員	-186.635	19.576	-.191	-9.534	.000
	parttime 妻 パート等	-130.868	15.195	-.153	-8.613	.000
	jiei 妻 自営業等	-64.826	21.730	-.043	-2.983	.003
	f1wk 1回 女性仕事時間 合計<分>	-.429	.032	-.295	-13.343	.000
	m1wk 1回 男性仕事時間 合計<分>	.064	.019	.041	3.332	.001
	Wkajieq 家事責任に対する 妻の意識 1=夫婦同等	-6.029	9.402	-.009	-.641	.521
	Hkajieq 家事責任に対する 夫の意識 1=夫婦同等	-23.668	9.980	-.031	-2.372	.018

a. 従属変数: f1hwD 1回女性家事 平日<分>

表 13 平日一日あたりの家事・育児時間に対する重回帰分析（第 1 回）
(n=3517)

調整済み R²=0.104

係数 ^a						
モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	-38.901	20.491		-1.898	.058
	A011 出生年月(年)H1	2.689	.428	.101	6.282	.000
	a022b 親同居有無H1	3.587	2.983	.019	1.202	.229
	a024a 就学前子ども数H1	21.466	1.720	.208	12.481	.000
	seishoku 妻 正規職員	-3.617	6.410	-.015	-.564	.573
	parttime 妻 パート等	-12.821	4.959	-.061	-2.585	.010
	jiei 妻 自営業等	4.645	7.099	.012	.654	.513
	f1wk 1回 女性仕事時間 合計<分>	.016	.011	.044	1.520	.129
	m1wk 1回 男性仕事時間 合計<分>	-.070	.006	-.177	-10.970	.000
	Wkajieq 家事責任に対する妻の意識 1=夫婦同等	7.828	3.071	.044	2.549	.011
	Hkajieq 家事責任に対する夫の意識 1=夫婦同等	18.266	3.252	.097	5.616	.000

a. 従属変数: m1hwD 1回男性家事 平日<分>

表 14 平日一日当たりの夫妻の家事・育児時間の差に対する重回帰分析（第 1 回）（n=3393）

調整済み $R^2=0.445$

係数 ^a					
モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	329.852	64.825		5.088	.000
A011 出生年月(年)H1	2.348	1.355	.022	1.733	.083
a022b 親同居有無H1	-20.987	9.510	-.029	-2.207	.027
a024a 就学前子ども数H1	120.266	5.473	.292	21.975	.000
seishoku 妻 正規職員	-186.790	20.488	-.192	-9.117	.000
parttime 妻 パート等	-117.152	15.838	-.139	-7.397	.000
jiei 妻 自営業等	-71.520	22.640	-.047	-3.159	.002
f1wk 1回 女性仕事時間 合計<分>	-.451	.034	-.310	-13.334	.000
m1wk 1回 男性仕事時間 合計<分>	.132	.020	.085	6.556	.000
Wkajieq 家事責任に対す る妻の意識 1=夫婦同等	-10.788	9.761	-.015	-1.105	.269
Hkajieq 家事責任に対す る夫の意識 1=夫婦同等	-45.388	10.350	-.061	-4.385	.000

a. 従属変数: D1hwD 平日家事時間の差(妻-夫)

表 15 妻の休日一日当たりの家事・育児時間に対する重回帰分析（第 1 回）（n=3533）

調整済み $R^2=0.260$

係数 ^a					
モデル	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	267.754	72.281		3.704	.000
A011 出生年月(年)H1	4.021	1.510	.039	2.662	.008
a022b 親同居有無H1	34.142	10.600	.047	3.221	.001
a024a 就学前子ども数H1	184.050	6.077	.456	30.286	.000
seishoku 妻 正規職員	-14.492	22.644	-.015	-.640	.522
parttime 妻 パート等	-5.325	17.562	-.006	-.303	.762
jiei 妻 自営業等	14.877	25.126	.010	.592	.554
f1wk 1回 女性仕事時間 合計<分>	-.166	.037	-.117	-4.475	.000
m1wk 1回 男性仕事時間 合計<分>	.027	.022	.018	1.223	.222
Wkajieq 家事責任に対す る妻の意識 1=夫婦同等	16.976	10.887	.025	1.559	.119
Hkajieq 家事責任に対す る夫の意識 1=夫婦同等	-24.710	11.566	-.033	-2.137	.033

a. 従属変数: f1hwE 1回女性家事 休日<分>

表 16 夫の休日一日当たりの家事・育児時間に対する重回帰分析（第 1 回）
(n=3518)

調整済み $R^2=0.112$

		係数 ^a		標準化係数 ベータ	t	有意確率
モデル		非標準化係数 B	標準誤差			
1	(定数)	-71.814	67.490		-1.064	.287
	A011 出生年月(年)H1	5.297	1.410	.060	3.755	.000
	a022b 親同居有無H1	9.356	9.837	.015	.951	.342
	a024a 就学前子ども数H1	105.654	5.670	.308	18.635	.000
	seishoku 妻 正規職員	-17.919	21.149	-.022	-.847	.397
	parttime 妻 パート等	-29.674	16.381	-.042	-1.812	.070
	jiei 妻 自営業等	-9.275	23.310	-.007	-.398	.691
	f1wk 1回 女性仕事時間 合計<分>	-.005	.035	-.004	-.148	.882
	m1wk 1回 男性仕事時間 合計<分>	.015	.021	.011	.711	.477
	Wkajieq 家事責任に対す る妻の意識 1=夫婦同等	12.272	10.156	.021	1.208	.227
	Hkajieq 家事責任に対す る夫の意識 1=夫婦同等	56.132	10.750	.090	5.222	.000

a. 従属変数: m1hwE 1回男性家事 休日<分>

表 17 夫婦の休日一日当たりの家事・育児時間の差に対する重回帰分析
(第 1 回) (n=3377)

調整済み $R^2=0.065$

		係数 ^a		標準化係数 ベータ	t	有意確率
モデル		非標準化係数 B	標準誤差			
1	(定数)	376.290	86.451		4.353	.000
	A011 出生年月(年)H1	-1.925	1.808	-.018	-1.065	.287
	a022b 親同居有無H1	21.945	12.691	.029	1.729	.084
	a024a 就学前子ども数H1	76.343	7.297	.181	10.462	.000
	seishoku 妻 正規職員	-.608	27.327	-.001	-.022	.982
	parttime 妻 パート等	20.634	21.137	.024	.976	.329
	jiei 妻 自営業等	14.370	30.038	.009	.478	.632
	f1wk 1回 女性仕事時間 合計<分>	-.156	.045	-.105	-3.472	.001
	m1wk 1回 男性仕事時間 合計<分>	.012	.027	.008	.447	.655
	Wkajieq 家事責任に対す る妻の意識 1=夫婦同等	7.470	13.056	.010	.572	.567
	Hkajieq 家事責任に対す る夫の意識 1=夫婦同等	-83.593	13.848	-.109	-6.037	.000

a. 従属変数: D1hwE 休日家事時間の差(妻-夫)

表 18 合計家事・育児時間、平日の家事・育児時間、休日の家事・育児時間
に関する重回帰分析の結果（要約）

	合計家事時間			平日家事時間			休日家事時間		
	妻	夫	差	妻	夫	差	妻	夫	差
妻の出生年	+	+	+	+	+		+	+	
親との同居の有無						—	+		
就学前子ども数	+	+	+	+	+	+	+	+	+
妻が正職員*	—		—	—		—			
妻がパート等*	—	—	—	—	—	—			
妻が自営業等*	—		—	—		—			
妻の仕事時間	—		—	—		—	—		—
夫の仕事時間	+	—	+	+	—	+			
家事責任に対する妻の意識		+			+				
家事責任に対する夫の意識	—	+	—	—	+	—	—	+	—

＋：有意水準 0.05 の正の効果 —：有意水準 0.05 の負の効果

*：妻が無職をレファレンスとした場合

（３）家事・育児時間の変化の規定要因の分析（第１回から第３回の変化）

ここでは、合計家事・育児時間の夫婦差（妻－夫）の第１回から第３回にかけての変化の量を被説明変数とし、他の変化が家事・育児時間の変化をどの程度説明するかをみてみる。ここで考慮する変数は、夫妻それぞれの仕事時間の変化、夫妻それぞれの就業形態の変化、出生の有無である。

表 19 妻と夫の家事・育児時間の差の変化（1回－3回）に対する重回帰分析（N=2775）

調整済み $R^2=0.205$

係数 ^a					
	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	-48.779	6.565		-7.430	.000
妻仕事時間変化(1-->3)	-.132	.036	-.091	-3.701	.000
夫仕事時間変化(1-->3)	.040	.020	.036	2.002	.045
妻就業状況変化(正規へ)	-233.321	36.096	-.114	-6.464	.000
妻就業状況変化(正規から他へ)	121.069	28.650	.077	4.226	.000
妻就業状況変化(正規以外から無職へ)	-113.557	19.150	-.128	-5.930	.000
妻就業状況変化(無職から正規以外へ)	110.241	26.179	.080	4.211	.000
夫就業状況変化(正規へ)	13.964	31.758	.008	.440	.660
夫就業状況変化(正規から他へ)	-57.231	26.042	-.038	-2.198	.028
夫就業状況変化(正規以外から無職へ)	53.461	66.253	.014	.807	.420
夫就業状況変化(無職から正規以外へ)	42.324	67.980	.011	.623	.534
出生あり(第1回から第2回にかけて)	192.716	15.951	.207	12.082	.000
出生あり(第2回から第3回にかけて)	242.373	17.725	.239	13.674	.000

a. 従属変数: D3D1hw 家事時間の差3回1回の差

夫と比べた妻の家事・育児時間は、妻の仕事時間が増加したことによって減少、夫の仕事時間が増加したことによって増加、妻が正規職員になったことで減少、妻が正規職員から他に変わったことで増加、妻が無職になったことで減少、妻が無職から他に変わったことで増加、夫が正規職員から他になったことで減少、そして1回と2回の間に子どもが生まれたことで増加、2回と3回の間に子どもが生まれたことで増加する、という結果が得られた。ここで観察された、妻の無職と正規以外の職（パートまたは自営）との変化による家事・育児時間の差の変化は、解釈が難しい。今後はこの点も含め、より精密な分析を進めていくこととしたい。

（４）出生と家事・育児時間の関連に関する分析

夫妻の家事分担が、出生意欲あるいは出生そのものが起きるかどうかに影響することはすでに指摘されている。福田（2005）は、家事分担の平等度が低く、家庭役割の遂行が妻に集中しているほど、子どもを持つことを肯定的に考える割合が少なくなることを示し（中立あるいは悪化するという考えをもつ人の割合が増える）、家事負担の増大が妻の子どもを持つことに対する意識構造を否定的な方向へ大きく変化すると結論づけている。また、釜野（2004）では、夫の家事分担が多い方が妻の出生意欲が高いことが示されている。厚生労働省による第3回の成年者縦断調査の報告においても、第1回から第2回にかけての家事・育児時間の増減別に、1年間（2回から3回にかけての）出生の状況を示し、夫の家事・育児時間が増加した夫婦の方が、夫の家事・育児時間が減少した夫婦に比べ、1年間で出生のあった割合が高いことを示している（厚生労働省大臣官房統計情報部, 2006）。

ここでは、試しに、第2回と第3回の間の出生の有無を被説明変数とし、第1回目の解きの夫の家事・育児時間、1回から2回の夫と妻の家事・育児時間の差の変化、夫妻それぞれの仕事時間、妻の就業形態（無職をレファレンスとし、正職員、パート等、自営業等）、第1回目の時の子ども数、妻の出生年、親との同居の状況を投入し、ロジスティック回帰分析を行った。結果は表20に示すとおり、有意水準0.05に基づく、第1回目の時の子ども数が多いことは、2、3回間での出生の発生を抑え、第1回での夫の家事・育児時間が長いことは、出生の発生を促し、第1回から第2回にかけて、夫に対する妻の家事・育児時間が増加していることは、出生の発生を抑えていると解釈することができる。このような結果については、今後さらに分析を極め、慎重に確認していくことが必要であるが、他の要因をコントロールしても、夫の家事遂行が、夫婦の出生に結びついている可能性を示唆しているといえよう。

表20 第2回調査から第3回調査の間の出生の有無に対するロジスティック回帰分析（夫の家事・育児時間の効果）：

方程式中の変数						
	B	標準 誤差	Wald	自由 度	有意確率	Exp (B)
a. 妻出生年(A011)	.126	.020	38.176	1	.000	1.134
子ども数(1回)a023a	-.672	.090	56.347	1	.000	.510
妻の親と同居(woya1)	-.263	.296	.788	1	.375	.769
夫の親と同居(hoya1)	.069	.159	.190	1	.663	1.072
正職員(1回)(seishoku)	.568	.393	2.087	1	.149	1.764
バイト・パート・派遣等(parttime)	-.088	.322	.075	1	.784	.916
自営業等(jiei)	.188	.404	.216	1	.642	1.206
夫仕事時間(1回)(m1wk)	.000	.000	1.641	1	.200	1.000
妻仕事時間(1回)(f1wk)	-.001	.001	.600	1	.439	.999
夫家事時間(1回)(m1hw)	.001	.001	4.925	1	.026	1.001
妻と夫の家事時間の差の変化(1回→2回) (D2D1hw)	-.001	.000	5.681	1	.017	.999
定数	-7.643	1.015	56.733	1	.000	.000

a. ステップ 1: 投入された変数 A011, a023a, woya1, hoyal, seishoku, parttime, jieil, m1wk, f1wk, m1hw, D2D1hw

3. まとめ

今年度の研究では、家事・育児時間の総合的な分析に向けた準備として、家事に関する研究を扱う文献整理を開始し、いくつかの分析を試みた。21世紀成年者縦断調査を用いた家事・育児時間に関する分析には、多数の可能性があり、独身者や夫婦の家事・育児時間の規定要因を分析することに加え、出生行動や出生意欲との関連性を分析するという課題の追求も可能なことが示された。来年度はここで示した分析を精査し、研究を進めていく予定である。

参考文献

- Carrington, Christopher (1999). *No Place Like Home: Relationships and Family Life among Lesbians and Gay Men*. Chicago: Chicago University Press.
- Coltrane, Scott (2000). Research on household labor: Modeling and measuring the social embeddedness of routine family work. *Journal of Marriage and Family*, 62, 1208-1233.
- Davis, Shannon N. and Greenstein, Theodore N. (2004). Cross-National Variations in the Division of Household Labor. *Journal of Marriage and Family* 66: 1260-1271.
- DeVault, Majorie. L. (1991). *Feeding the Family: The Social Organization of Caring as Gendered Work*. Chicago, University of Chicago Press.
- Diefenbach, Heike (2002). Gender ideologies, relative resources, and the division of housework in intimate relationships: A test of Hyman Rodman's theory of resources in cultural context. *International Journal of Comparative Sociology*, 43, 45-64.
- 福田亘孝 (2005). 「子どもに対する意識構造のジェンダー比較－潜在クラス・モデルによる分析－」『季刊社会保障研究』41(2): 83-95.
- Geist, Claudia (2005). The Welfare State and the Home: Regime Differences in the Domestic Division of Labour. *European Sociological Review*, 21(1): 23-41.
- Greenstein, Theodore N. (1996). Husbands' participation in domestic labor: Interactive effects of wives' and husbands' gender ideologies. *Journal of Marriage and the Family*, 58, 585-595.
- Halleröd, Björn (2005). Sharing of housework and money among Swedish couples: Do they behave rationally? *European Sociological Review*, 21, 273-288.
- 稲葉昭央・岩井紀子 (2000) 「家事に参加する夫、しない夫」『日本の階層システム4：ジェンダー、仕事、家族』盛山和夫、東京大学出版、Pp. 193-215.
- Iwama, Akiko (2005). Social Stratification and the Division of Household Labor in Japan: The Effect of Wives' Work on the Division of Labor among Dual-earner Families, *International Journal of Japanese Sociology* 14: 15-31.
- 釜野さおり (1999) 「女性の結婚意欲と出産意欲？ ジェンダー意識とジェンダー関係との関連の分析？」阿藤誠編『家族政策および労働政策が出生率および人口に及ぼす影響に関する研究』平成8年度～平成10年度厚生科学研究費総合報告書, 610-622.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2000) 『現代日本の家族変動－第2回全国家庭動向調査－』国立社会保障・人口問題研究所.
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 (2006) 『第3回21世紀成年者縦断調査（国民の生活に関する縦断調査）結果の概要』.
- 松田茂樹・鈴木征男 (2002) 「夫婦の労働時間と家事時間の関係－社会生活基本調査の個票データを用いた夫婦の家事時間の規定要因分析－」『家族社会学研究』13-2: 73-86.
- 松田智子 (2004) 「共働きカップルにおける家事労働分担：伝統的パターンは流動化しているか？」善積京子編『スウェーデンの家族とパートナー関係』青木書店.

- 永井暁子 (1999) 「家事労働遂行の規定要因」樋口美雄・岩田正美編『パネルデータからみ
現代女性 結婚・出産・就業・消費・貯蓄』東洋経済新報社, pp. 93-125.
- 内閣府男女共同参画局 (2000) 『男女共同参画社会に関する国際比較調査』
- 西岡八郎 (2004) 「男性の家庭役割とジェンダー・システムー夫の家事・育児行動を規定す
る要因ー」目黒依子・西岡八郎(編)『少子化のジェンダー分析』勁草書房, pp. 174-196.
- Shelton, Beth A. & Daphne, John (1996). The division of household labor. *American Review of
Sociology*, 22, 299-322.
- Van Berkel, Michel and De Graaf, Nan Dirk (1999). By virtue of pleasantness? Housework and the
effects of education revisited. *Sociology*, 33, 785-808.

(2) 出生児縦断調査の回答者・保育担当者の概要 —— 第3回・第4回を中心に ——

元森 絵里子

はじめに

本稿は、前年度の著者報告『21世紀出生児縦断調査』における保育担当者の意識分析に向けて¹を、同調査の第3回、第4回調査の結果を中心に補足するものである。

「21世紀出生児縦断調査」においては、子どもの成長に伴う子どもや育児に対する回答者の意識を問う設問（以下「意識関連項目」）が存在し、育児不安などの文脈で重要な資料となりうる¹。これらの設問は、主に育児を担当する親の主観的な喜びや負担感を問うものである。しかし、同調査は子どもを調査客体とするものから、回答者がふだんの保育担当者と一致しないケースや、一致したとしても子どもとの続柄によって社会的役割が異なり、同一の枠組みで分析が可能か問題となるケースがあり、それらの回答が混ざることで、集計結果にゆがみが生じている可能性がある。

そのため、前稿では、主に第1回および第2回の調査について、回答者と保育担当者の関係を概観し、回答者とふだんの保育担当者がともに母親であるケースに限定した場合、回収全ケースに対して、サンプルにどのような偏りが生ずるかを、概観した。

本稿では、これらを受けて、まず「21世紀出生児縦断調査」の第3回、第4回調査における回答者と保育担当者の関係を概観し、第1回から第4回までの回答者およびふだんの保育担当者が母親であるケースの数の推移を見る(1)。その上で、第3回、第4回調査において、回答者とふだんの保育担当者がともに母親であるケースと全ケースの比較を行う(2)。最後に、分析事例として、意識関連項目の中でも特に回答者の属性や子どもとのかかわりに大きく影響されると思われる、育児の負担感に関する設問について、前稿同様、回答者とふだんの保育担当者がともに母親であるケースに限定して規定要因の分析を行った後、第4回調査を例に「負担感」のタイプを析出し、各タイプの負担感を表明しやすい層を特定することを試みる(3)。これらによって、調査の結果を読み解く際の基礎資料を提供したい。

¹ 具体的には、「平成13年1月(7月)に生まれたお子さんを育てていて(第1回のみ「もって」)よかったと思うことはなんですか」、「負担に思うことは何ですか」、「不安や悩みがありますか」といったものである。また、ここでは検討していないが、「日ごろ、子育てで意識して行っていることは何ですか」(第1回)、「どのような子に育てて欲しいと思いますか」(第3回)、「お子さんの健康に関することでどのようなことを意識して行っていますか」「お子さんが悪いことをした場合どのように対応していますか」(第4回)なども、回答者の属性や子育てへの関わりに影響されるかもしれない。

1. 回答者の分析

まず、回答者とふだんの保育担当者の関係性がどうなっているのかを概観する。第3回および第4回調査における、回答者とふだんの保育者の関係性を見たものが表1、2である²。ともに複数回答である。保育担当者（の少なくとも一人）と回答者（の少なくとも一人）が一致したケースに網掛けを施した。

表1 回答者とふだんの保育者のクロス表(第3回調査)

N=42,812

		ふだんの保育者（複数回答）										合計
		お母さん	お父さん	母の母親	母の父親	父の母親	父の父親	保育所・託児所の保育士	保育ママさんやベビーシッター	その他	不詳	
回答者 (複数回答)	お母さん	37,215 86.9%	17,593 41.1%	5,923 13.8%	2,279 5.3%	4,635 10.8%	1,966 4.6%	10,512 24.6%	161 0.4%	914 2.1%	11 0.0%	39,852 93.1%
	お父さん	2,946 6.9%	1,783 4.2%	389 0.9%	175 0.4%	525 1.2%	237 0.6%	878 2.1%	21 0.0%	70 0.2%	1 0.0%	3,283 7.7%
	母の母親	80 0.2%	29 0.1%	49 0.1%	12 0.0%	9 0.0%	0 0.0%	38 0.1%	1 0.0%	7 0.0%	0 0.0%	116 0.3%
	母の父親	9 0.0%	1 0.0%	7 0.0%	4 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	3 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	13 0.0%
	父の母親	32 0.1%	36 0.1%	1 0.0%	0 0.0%	53 0.1%	25 0.1%	28 0.1%	0 0.0%	11 0.0%	0 0.0%	75 0.2%
	父の父親	11 0.0%	8 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	9 0.0%	9 0.0%	5 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	16 0.0%
	その他	8 0.0%	4 0.0%	2 0.0%	0 0.0%	4 0.0%	1 0.0%	7 0.0%	0 0.0%	7 0.0%	0 0.0%	15 0.0%
	不詳	115 0.3%	47 0.1%	14 0.0%	6 0.0%	14 0.0%	4 0.0%	50 0.1%	1 0.0%	1 0.0%	16 0.0%	154 0.4%
	合計	39,743 92.8%	19,084 44.6%	6,274 14.7%	2,429 5.7%	5,153 12.0%	2,189 5.1%	11,378 26.6%	182 0.4%	991 2.3%	27 0.1%	42,812 100.0%

注)割合はケース数に対する。

注2)回答者と保育者が一致している箇所を網掛けをした。

表2 回答者とふだんの保育者のクロス表(第4回調査)

N=41,599

		ふだんの保育者（複数回答）											合計
		お母さん	お父さん	母の母親	母の父親	父の母親	父の父親	保育所・託児所の保育士	保育ママさんやベビーシッター	幼稚園の先生	その他	不詳	
回答者 (複数回答)	お母さん	35,931 86.5%	17,095 41.1%	5,274 12.7%	2,112 5.1%	4,057 9.8%	1,778 4.3%	13,245 31.9%	107 0.3%	6,363 15.3%	686 1.7%	11 0.0%	38,964 93.8%
	お父さん	2,491 6.0%	1,566 3.8%	336 0.8%	131 0.3%	496 1.2%	205 0.5%	986 2.4%	8 0.0%	443 1.1%	52 0.1%	1 0.0%	2,842 6.8%
	母の母親	73 0.2%	24 0.1%	58 0.1%	12 0.0%	8 0.0%	1 0.0%	52 0.1%	1 0.0%	20 0.0%	5 0.0%	0 0.0%	120 0.3%
	母の父親	13 0.0%	5 0.0%	10 0.0%	9 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	6 0.0%	0 0.0%	5 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	15 0.0%
	父の母親	37 0.1%	36 0.1%	2 0.0%	2 0.0%	74 0.2%	23 0.1%	54 0.1%	0 0.0%	10 0.0%	6 0.0%	0 0.0%	93 0.2%
	父の父親	6 0.0%	6 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	9 0.0%	5 0.0%	6 0.0%	0 0.0%	2 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	11 0.0%
	その他	20 0.0%	11 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	8 0.0%	2 0.0%	16 0.0%	0 0.0%	2 0.0%	14 0.0%	0 0.0%	31 0.1%
	不詳	109 0.3%	48 0.1%	15 0.0%	5 0.0%	17 0.0%	9 0.0%	45 0.1%	1 0.0%	37 0.1%	3 0.0%	2 0.0%	133 0.3%
	合計	38,082 91.6%	18,381 44.2%	5,602 13.5%	2,234 5.4%	4,567 11.0%	1,978 4.8%	14,198 34.2%	116 0.3%	6,767 16.3%	749 1.8%	14 0.0%	41,599 100.0%

注)割合はケース数に対する。

注2)回答者と保育者が一致している箇所を網掛けをした。

² 表1（第3回調査）は、前年度報告書の再掲。数値がわずかに異なるのは、準拠したデータが2006年11月22日時点の最新版のため。以下の分析でも、この点は同様。

やはり、ふだんの保育担当者（の少なくとも一人）が母親で、回答者（の少なくとも一人）が母親のケースが、第1回、第2回調査（第1回 89.4%、第2回 89.5%）同様、大半を占める（第3回 86.9%、第4回 86.5%）。それ以外は、回答者とふだんの保育担当者がともに父親であるケースが第3回で 4.2%、第4回で 3.8%ある他は、回答者とふだんの保育担当者が一致していないケースであると考えられる。

そこで、回答者とふだんの保育担当者がともに母親であるケースを除いて、回答者とふだんの保育者の関係がどうなっているかを見てみたのが、表 3.4 である。

表3 回答者＝保育者＝母以外のケースの回答者とふだんの保育者のクロス表(第3回調査)

		ふだんの保育者（複数回答）									
		お母さん	お父さん	母の母親	母の父親	父の母親	父の父親	保育所・託児所の保育士	保育ママさんやベビーシッター	その他	不詳
回答者 (複数回答)	お母さん	0 0.0%	28 0.1%	470 1.1%	167 0.4%	401 1.0%	145 0.3%	1,961 4.7%	19 0.0%	69 0.2%	11 0.0%
	お父さん	2,300 5.5%	1,376 3.3%	299 0.7%	134 0.3%	444 1.1%	194 0.5%	759 1.8%	19 0.0%	53 0.1%	1 0.0%
	母の母親	68 0.2%	25 0.1%	41 0.1%	10 0.0%	9 0.0%	0 0.0%	37 0.1%	1 0.0%	5 0.0%	0 0.0%
	母の父親	8 0.0%	1 0.0%	6 0.0%	4 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	3 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	0 0.0%
	父の母親	24 0.1%	32 0.1%	0 0.0%	0 0.0%	49 0.1%	23 0.1%	26 0.1%	0 0.0%	11 0.0%	0 0.0%
	父の父親	7 0.0%	7 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	8 0.0%	7 0.0%	5 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	0 0.0%
	その他	8 0.0%	4 0.0%	2 0.0%	0 0.0%	4 0.0%	1 0.0%	7 0.0%	0 0.0%	7 0.0%	0 0.0%
	不詳	115 0.3%	47 0.1%	14 0.0%	6 0.0%	14 0.0%	4 0.0%	50 0.1%	1 0.0%	1 0.0%	16 0.0%

表4 回答者＝保育者＝母以外のケースの回答者とふだんの保育者のクロス表(第4回調査)

		ふだんの保育者（複数回答）										
		お母さん	お父さん	母の母親	母の父親	父の母親	父の父親	保育所・託児所の保育士	保育ママさんやベビーシッター	幼稚園の先生	その他	不詳
回答者 (複数回答)	お母さん	0 0.0%	37 0.1%	386 0.9%	115 0.3%	335 0.8%	114 0.3%	2,319 5.4%	21 0.0%	346 0.8%	45 0.1%	11 0.0%
	お父さん	1,928 4.5%	1,176 2.7%	261 0.6%	102 0.2%	418 1.0%	166 0.4%	830 1.9%	8 0.0%	342 0.8%	38 0.1%	1 0.0%
	母の母親	62 0.1%	20 0.0%	50 0.1%	8 0.0%	7 0.0%	1 0.0%	46 0.1%	1 0.0%	18 0.0%	5 0.0%	0 0.0%
	母の父親	8 0.0%	3 0.0%	7 0.0%	6 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 0.0%	0 0.0%	4 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	父の母親	28 0.1%	31 0.1%	2 0.0%	2 0.0%	66 0.2%	22 0.1%	48 0.1%	0 0.0%	10 0.0%	6 0.0%	0 0.0%
	父の父親	4 0.0%	4 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	7 0.0%	4 0.0%	4 0.0%	0 0.0%	2 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
	その他	15 0.0%	8 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	8 0.0%	2 0.0%	13 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	11 0.0%	0 0.0%
	不詳	109 0.3%	48 0.1%	15 0.0%	5 0.0%	17 0.0%	9 0.0%	45 0.1%	1 0.0%	37 0.1%	3 0.0%	2 0.0%

それによると、保育者が母親であるのに父親が回答したケース（第3回 5.5%、第4回 4.5%）や、ふだんの保育者が保育士であるのに母親が回答したケース（第3回 4.7%、第4回 5.4%）が目立つほか、父や母の父母（祖父母）が保育をしながら回答は父や母が行ったケースもあることがわかる。もちろん、回答を相談した場合や分担した場合もありえるし、誰を「ふだんの保育者」と認識するかには、ある程度主観的要素も含まれると考えられる。

しかし、分析結果を考慮する際、大半を占める回答者とふだんの保育者がともに母親であるケースと比べて、そうでないと明らかにわかるケースが 1 割以上含まれているということとは注意する必要があるだろう。

次に、第 1 回目から第 4 回目にすべて回答したケースにおける、回答者の変化を見たのが表 5 である³。見通しを良くするために、回答者が母親であるか否かにのみ注目している。母親が一貫して回答しているケースが 84.7%と大半を占めている。注目すべきは、4 回とも母親以外が回答したケースは 1.7%であるということである。これはつまり、各回において母親が回答していないケースの多くは、恒常的な強い理由があるというよりも、そのときどきの状況でたまたま他の人が回答する場合が少なくないということではないだろうか。各回とも、母親が回答者であるケースが 9 割を越えることから、これは明らかであろう。しかし、母親が回答したケースが第 1 回では全ケース中 92.1%であったことを考えれば、「たまたま」が累積した効果は無視できない。

表5 第1回から第4回までの回答者の変遷

第1回	第2回	第3回	第4回	度数	パーセント
回答者＝お母さん	回答者＝お母さん	回答者＝お母さん	回答者＝お母さん	33754	84.7
		それ以外	それ以外	719	1.8
			回答者＝お母さん	788	2.0
		それ以外	それ以外	236	0.6
	回答者＝お母さん		回答者＝お母さん	640	1.6
			それ以外	122	0.3
	それ以外		回答者＝お母さん	162	0.4
		それ以外	258	0.6	
それ以外	回答者＝お母さん	回答者＝お母さん	回答者＝お母さん	1431	3.6
		それ以外	それ以外	137	0.3
			回答者＝お母さん	200	0.5
		それ以外	それ以外	145	0.4
	回答者＝お母さん		回答者＝お母さん	274	0.7
			それ以外	100	0.3
	それ以外		回答者＝お母さん	181	0.5
		それ以外	692	1.7	
合計				39839	100.0

同様に、回答者と主な保育者がともに母親であるケースの変遷を見たのが表 6 である⁴。一貫して母親であるケースは 73.7%にまで落ち込んでいる。大幅に常にそれ以外であるケースは 2.3%にすぎない一方で、一貫して母親であるケースが第 1 回の 91.9%から大きく減少していることを考えると、やはり無視できない影響がある。

このように、仮に厳密に回答者や保育担当者を母親に限定して意識関連項目を分析しようとした場合、各回ごとに独立に分析する場合でも 15%、プールデータを用いようとした場合は、最大で 3 割近いケースが損なわれることになる。もちろん、本調査はあくまでも

³ 脱落ケースも含めた場合を、付表 1 として章末に掲載した。そこでは、母親が一貫して回答しているケースは 71.8%となる。

⁴ 脱落ケースも含めた場合を、付表 2 として章末に掲載した。

出生児を客体とするものであるし、様々な家庭の事情に配慮すれば、回答者を厳密に指定することは難しいと思われる。しかし、一般に母親を対象とした他の調査との比較などを考える場合、例えば、意識関連項目の前後に当該項目の回答者を厳密に尋ねたり、前回との回答者の異同を尋ねたりする設問を置くなど、暗に同一の方に一貫して回答いただくように促す仕掛けを施すことも検討してもよいのではないだろうか。

表6 第1回から第4回までの回答者・保育者がともに母親のケースの変遷

第1回	第2回	第3回	第4回	度数	パーセント
回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	29370	73.7
		それ以外	それ以外	1844	4.6
		回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	1449	3.6
		それ以外	それ以外	791	2.0
	それ以外	回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	923	2.3
		それ以外	それ以外	303	0.8
		回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	396	1.0
		それ以外	それ以外	687	1.7
それ以外	回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	1608	4.0
		それ以外	それ以外	256	0.6
		回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	280	0.7
		それ以外	それ以外	247	0.6
	それ以外	回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	349	0.9
		それ以外	それ以外	165	0.4
		回答者＝保育者＝お母さん	回答者＝保育者＝お母さん	237	0.6
		それ以外	それ以外	934	2.3
合計				39839	100.0

2. 母親＝回答者＝主な保育者の特徴

ここでは、第3回および第4回調査について、母親が回答者と主な保育者双方に含まれているケースの回答者に注目し、子どもや家族に関する基本的な項目を見る。これは、つまり、意識関連項目の分析などの際に、仮に役割と回答者で厳密に統制した分析を行った場合、全ケースに対してどの程度のゆがみがあるのかを見るということである。

回答者＝主な保育者＝母親のケースと、当該回の回収ケース全体について、子どもや家族に関する基本的な項目の回答傾向を示したのが表7,8である。ここから、回答者と主な保育者がともに母親であるケースに絞った場合、全体と比べて、以下のような特徴がわかる。

第3回

- ・ 祖父母と現に別居しているケースが多く、同居しているケースが少ない。同様に、前年度から継続して別居であるケースが多く、継続して同居しているケースが少ない。
- ・ 保育士等（保育士、保育ママさん）を利用しているケースが少ない
- ・ 現在の職業⁵は無職が多く、専門・技術職と事務職が少ない。全体的な傾向から推測

⁵ 第3回は、第6回までの他の回に存在する「就業状況」を尋ねた項目がない。

しても、家事専門のケースが多く、常勤またはパートのケースが少ないと考えられる。

第4回

- ・ 祖父母と現に別居しているケースが多く、同居しているケースが少ない。同様に、前年度から継続して別居であるケースが多く、継続して同居しているケースが少ない。
- ・ 家事専門のケースが多く、勤め（常勤）と勤め（パート・アルバイト）が少ない。また、家事や無職の場合は、仕事を探していないケースが多い。

なお、第1回、第2回の特徴は以下であった（元森 2006）。

第1回

- ・ 保育士等（ここでは保育士と保育ママさん）がふだんの保育者に含まれているケースが少なく、探していない場合が多い
- ・ 現在の就業状況が勤め（常勤）のケースが少ない

第2回

- ・ 祖父母と別居を継続しているケースが多い。（同居を継続しているケースがわずかに少ない）
- ・ 保育士等（ここでは保育士と保育ママさん）がふだんの保育者に含まれているケースが少ない
- ・ 現在の就業状況が、家事専門のケースが多く、勤め（常勤）のケースが少ない。

これらから、第4回までのすべての調査を一貫して、祖父母と別居していたり、母親が専業主婦であったり、保育士等は当てにしていなかったりするケースが多く含まれていることがわかる。逆に、母親が就業していたり、同居の祖父母の援助や保育士等に頼っている場合、「ふだんの保育者」として「母親」をあげていないか、「母親」が回答者となっていないケースが増えるのであろう。つまり、意識関連項目の分析の際に、回答者や保育担当者で統制した分析を行うことが必要となってくると考えられるが、その場合得られた結果は、上記の層の意識にやや偏ったものであるということである。

なお、参考までに、第4回まで一貫して、回答者＝ふだんの保育者＝母親だった 29,370 ケースと、第1回調査の回収ケース全体とについて、同様の比較を行ったのが表9である。上述の各回ごとと変化がさらに大きな比率の差となって表れているほか、母親の年齢で20代前半以下の層が少なく、20代後半以降の層が多くなっている⁶。

⁶ なお、これらの傾向を、第1回から第3回調査までの脱落者の分析(福田・金子(2005)、西野(2006))と合わせて見てみると、回答者＝保育者＝母親に当てはまらないケースに多い、祖父母と同居している、保育士等がふだんの保育者に含まれている、母親が就業しているといった点は、脱落者の傾向の一部と一致している。すなわち、回答者＝保育者＝母親ではないケースは、脱落層と近い傾向があるということである。ただし、他の項目を見ると、父親の家事育児協力が得られている点などで、脱落層と明確な相違がある。

表7 第3回調査の回答者＝主な保育者＝母親のケース

		該当ケース		回収ケース全体	
		度数	パーセント	度数	パーセント
合計		37,215	100.0	42,812	100.0
母親の年齢(第1回時)	19歳以下	444	1.2	517	1.2
	20～24歳	4,178	11.2	4,887	11.4
	25～29歳	14,439	38.8	16,477	38.5
	30～34歳	13,342	35.9	15,324	35.8
	35～39歳	4,293	11.5	5,006	11.7
	40歳以上	519	1.4	601	1.4
単胎／多胎	単胎	36,490	98.1	41,968	98.0
	双子	701	1.9	820	1.9
	三つ子	24	0.1	24	0.1
祖父母との同居	同居	8,087	21.7	9,868	23.0
	同居せず	29,128	78.3	32,944	77.0
同居者構成の変化	前回(第2回)から祖父母と別居	31,147	72.8	27,658	74.3
	祖父母と別居 → 同居	1,032	2.4	851	2.3
	前回(第2回)から祖父母と同居	8,539	19.9	7,030	18.9
	祖父母と同居 → 別居	946	2.2	784	2.1
	不詳	1,148	2.7	892	2.4
母との同居	同居	37,215	100.0	42,691	99.7
	同居せず	0	0.0	121	0.3
父との同居	同居	35,898	96.5	41,164	96.2
	同居せず	1,317	3.5	1,648	3.8
父の同別居の状況	同居	40,361	94.3	35,199	94.6
	単身赴任中(定期的に帰宅)	803	1.9	699	1.9
	単身赴任中(帰宅しない)	230	0.5	200	0.5
	別居・死別・離別	1,418	3.3	1,117	3.0
兄弟姉妹の有無	兄弟姉妹あり	24,740	66.5	28,261	66.0
	兄弟姉妹なし	12,475	33.5	14,551	34.0
保育士等利用	利用	8,634	23.2	11,488	26.8
	利用せず	28,581	76.8	31,324	73.2
調査時の母親の職業業(出産2年半後)	無職(家事専業、失業中を含む)	25,430	68.3	27,259	63.7
	学生	66	0.2	84	0.2
	専門・技術職	3,442	9.2	4,438	10.4
	管理職	100	0.3	134	0.3
	事務職	3,173	8.5	4,262	10.0
	販売職	1,276	3.4	1,648	3.8
	サービス職	1,811	4.9	2,326	5.4
	保安職	32	0.1	50	0.1
	農林漁業職	201	0.5	244	0.6
	運輸・通信職	68	0.2	83	0.2
	生産工程・労務職	1,001	2.7	1,402	3.3
	その他	389	1.0	503	1.2
	不詳	226	0.6	379	0.9

(注)1%以上差がついている項目に網掛けをした

表8 第4回調査の回答者＝主な保育者＝母親のケース

		該当ケース		回収ケース全体	
		度数	パーセント	度数	パーセント
合計		35,931	100.0	41,559	100.0
母親の年齢(第1回時)	19歳以下	388	1.1	473	1.1
	20～24歳	3,932	10.9	4,676	11.3
	25～29歳	13,928	38.8	16,021	38.6
	30～34歳	12,959	36.1	14,921	35.9
	35～39歳	4,224	11.8	4,890	11.8
	40歳以上	500	1.4	578	1.4
単胎／多胎	単胎	35,213	98.0	40,740	98.0
	双子	700	1.9	798	1.9
	三つ子	18	0.1	21	0.1
祖父母との同居	同居	7,752	21.6	9,670	23.3
	同居せず	28,179	78.4	31,889	76.7
同居者構成の変化	前回(第3回)から祖父母と別居	26,880	74.8	30,290	72.9
	祖父母と別居？ 同居	784	2.2	970	2.3
	前回(第3回)から祖父母と同居	6,795	18.9	8,459	20.4
	祖父母と同居？ 別居	746	2.1	894	2.2
	不詳	726	2.0	946	2.3
母との同居	同居	35,921	100.0	41,395	99.6
	同居せず	10	0.0	164	0.4
父との同居	同居	34,394	95.7	39,592	95.3
	同居せず	1,537	4.3	1,967	4.7
父の同別居の状況	同居	33,649	93.6	38,755	93.3
	単身赴任中(定期的に帰宅)	745	2.1	837	2.0
	単身赴任中(帰宅しない)	159	0.4	186	0.4
	別居・死別・離別	1,378	3.8	1,781	4.3
兄弟姉妹の有無	兄弟姉妹あり	27,396	76.2	31,508	75.8
	兄弟姉妹なし	8,535	23.8	10,046	24.2
	不詳			5	0.0
調査時の母の就業状況(出産3年半後)	家事(専業)	20,213	56.3	21,546	51.8
	無職	1,625	4.5	1,877	4.5
	学生	56	0.2	74	0.2
	勤め(常勤)	4,585	12.8	6,493	15.6
	勤め(パート・アルバイト)	6,066	16.9	7,539	18.1
	自営業・家業	1,902	5.3	2,205	5.3
	内職	787	2.2	849	2.0
	その他	324	0.9	400	1.0
	不詳	373	1.0	576	1.4
家事・無職の場合	仕事を探している	3,365	9.4	3,676	8.8
	探していない	18,378	51.1	19,634	47.2
	不詳	468	1.3	689	1.7

(注)1%以上差がついている項目に網掛けをした

表9 第4回まですべて回答者＝主な保育者＝母親のケース

		該当ケース		回収ケース全体	
		度数	パーセント	度数	パーセント
合計		29370	100.0	47,015	100.0
母親の年齢(第1回調査時)	19歳以下	319	1.1	644	1.4
	20～24歳	3,133	10.7	5,680	12.1
	25～29歳	11,404	38.8	18,069	38.4
	30～34歳	10,677	36.4	16,561	35.2
	35～39歳	3,426	11.7	5,405	11.5
	40歳以上	411	1.4	656	1.4
単体 / 多胎	単胎	28,769.00	98.0	46,039	97.9
	双子	584.00	2.0	947	2.0
	3つ子	17.00	0.1	29	0.1
同居の状況(母)	同居	29,369	100.0	46,961	99.9
	同居せず	1	0.0	54	0.1
同居の状況(父)	同居	28,919	98.5	45,917	97.7
	同居せず	451	1.5	1,098	2.3
祖父母との同居	同居	5,749	19.6	10,308	21.9
	同居せず	23,621	80.4	36,707	78.1
保育士等の利用	利用	659	2.2	1,980	4.2
	利用せず	28,711	97.8	45,035	95.8
兄弟の有無	兄弟あり	14,760	50.3	23,511	50.0
	兄弟なし	14,610	49.7	23,504	50.0
母親の出産1年前の就業状況	無職	13,873	47.2	20,389	43.4
	学生	258	0.9	557	1.2
	勤め(常勤)	8,368	28.5	14,886	31.7
	勤め(パート・アルバイト)	4,970	16.9	8,099	17.2
	自営業・家業	1,267	4.3	2,016	4.3
	内職	291	1.0	424	0.9
	その他	145	0.5	202	0.4
	不詳	198	0.7	429	0.9
調査時の母親の就業状況(出産半年後)	仕事を探している	2,466	8.4	4,447	9.5
	探していない	20,940	71.3	30,066	63.9
	学生	44	0.1	99	0.2
	現在育児休業中	2,408	8.2	4,725	10.0
	勤め(常勤)	767	2.6	2,532	5.4
	勤め(パート・アルバイト)	867	3.0	1,967	4.2
	自営業・家業	1,237	4.2	2,020	4.3
	内職	299	1.0	485	1.0
	その他	80	0.3	126	0.3
	不詳	262	0.9	531	1.1

(注)1%以上差がついている項目に網掛けをした

3. 子育ての負担感の規定要因（分析事例）

3.1 回答傾向

以下では、第1回から第4回まで一貫して存在する、「平成13年1月（7月）に生まれたお子さんを育てていて（第1回のみ「もって」）負担に思うことは何ですか」という設問に対する回答の傾向を、回答者＝主な保育者＝母親のケースの場合とそれ以外の場合を比較しつつ検討する。

まず、脱落を除いた各回の全回答ケースにおける、負担感項目の選択率の変化を見たのが、表10である。

さらに、各回ごとに、回答者＝保育者＝母のケースとそれ以外のケースに分けて選択率を見たのが表11である。 χ^2 乗検定の結果、有意差があったものに不等号を付してある。回答者＝保育者＝母のケースとそれ以外のケースとを見比べてみると、数値に1%以上の大きな違いはないとわかる。これは、該当ケースが、各回85%前後を占めることを考えれば納得がいく。従って、回答傾向の把握などの大まかな分析に限れば、回答者と保育者の一致不一致や属性をさほど考慮せずとも分析に差し支えないと言えよう。

表10 子育て負担感の回答傾向の推移

	第1回 (出産半年後) N=47015	第2回 (出産1年半後) N=43925	第3回 (出産2年半後) N=42812	第4回 (出産3年半後) N=41559
子育てによる身体の疲れが大きい	39.5%	39.3%	31.8%	30.3%
子育てで出費がかさむ	34.7%	27.0%	25.9%	31.6%
自分の自由な時間が持てない	55.2%	63.7%	58.4%	52.8%
夫婦で楽しむ時間がない	24.3%	24.9%	—	—
しつけのしかたが家庭内で一致していない	—	—	9.5%	11.9%
仕事に十分にできない	12.2%	16.3%	—	—
仕事や家事に十分にできない	—	—	20.1%	20.1%
配偶者が育児に参加してくれない	—	—	6.2%	6.9%
子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない	5.8%	6.0%	—	—
子どもについてのまわりの目や評価が気になる	—	—	5.2%	8.3%
目が離せないのが気が休まらない	—	34.1%	22.8%	15.2%
子どもを持つ親同士の関係がうまくいかない	—	—	1.2%	1.6%
子どもを一時的にあずけたいときにあずけ先がない	—	—	12.0%	11.1%
子どもが言うことを聞かない	—	—	21.8%	27.5%
子どもが病気がちである	3.5%	6.4%	4.2%	3.9%
子どもが急病のとき見てくれる医者が近くにいない	—	—	3.5%	3.5%
子どもの成長の度合いが気になる	—	—	7.2%	7.6%
しつけのしかたがわからない	—	—	8.8%	7.3%
子どもを好きになれない	—	—	0.3%	0.4%
気持ちに余裕を持って子どもに接することができない	—	—	—	22.8%
子どもが保育所・幼稚園に行きたがらない	—	—	—	2.5%
その他	5.9%	3.9%	3.0%	3.4%
負担に思うことや悩みは特にない	19.9%	12.3%	13.2%	12.1%

(注)第5回、第6回も第4回と同一の設問構成である。

表11 子育て負担感の回答傾向の推移(回答者＝保育者＝母のケースとそれ以外のケースの比較)

	第1回		第2回		第3回		第4回	
	N=42029	N=4986	N=39309	N=4616	N=37215	N=5597	N=35931	N=5628
	回答者＝ 保育者＝ 母のケー ス	それ以外	回答者＝ 保育者＝ 母のケー ス	それ以外	回答者＝ 保育者＝ 母のケー ス	それ以外	回答者＝ 保育者＝ 母のケー ス	それ以外
子育てによる身体の疲れが大 きい	16,565 39.4%	2,008 40.3%	15,585 39.6%	1,671 36.2%	12,066 32.4%	1,567 28.0%	11,071 30.8%	1,513 26.9%
子育てで出費がかさむ	14,369 34.2%	1,955 39.2%	10,494 26.7%	1,363 29.5%	9,473 25.5%	1,612 28.8%	11,305 31.5%	1,818 32.3%
自分の自由な時間が持てない	23,311 55.5%	2,623 52.6%	25,381 64.6%	2,596 56.2%	22,096 59.4%	2,895 51.7%	19,146 53.3%	2,801 49.8%
夫婦で楽しむ時間がない	9,813 23.3%	1,635 32.8%	9,555 24.3%	1,381 29.9%				
しつけのしかたが家族内で一 致していない					3,503 9.4%	576 10.3%	4,281 11.9%	681 12.1%
仕事が多分にできない	5,117 12.2%	620 12.4%	6,430 16.4%	730 15.8%				
仕事や家事が多分にできない					7,483 20.1%	1,121 20.0%	7,237 20.1%	1,115 19.8%
配偶者が育児に参加してくれ ない					2,445 6.6%	227 4.1%	2,608 7.3%	248 4.4%
子育てが大変なことを身近な 人が理解してくれない	2,497 5.9%	211 4.2%	2,412 6.1%	224 4.9%				
子どもについてまわりの目や 評価が気になる					2,016 5.4%	190 3.4%	3,173 8.8%	272 4.8%
目が離せないのが気が休まら ない			13,393 34.1%	1,600 34.7%	8,485 22.8%	1,255 22.4%	5,415 15.1%	886 15.7%
子どもをもつ親同士の関係が うまくいかない					470 1.3%	49 0.9%	600 1.7%	63 1.1%
子どもを一時的に預けたい時 にあずけ先がない					4,669 12.5%	477 8.5%	4,227 11.8%	402 7.1%
子どもが言うことを聞かない					8,258 22.2%	1,092 19.5%	10,049 28.0%	1,394 24.8%
子どもが病気がちである	1,423 3.4%	225 4.5%	2,431 6.2%	382 8.3%	1,491 4.0%	313 5.6%	1,361 3.8%	270 4.8%
子どもが急病の時診てくれる 医者が近くにいない					1,271 3.4%	237 4.2%	1,218 3.4%	223 4.0%
子どもの成長の度合いが気にな る					2,613 7.0%	466 8.3%	2,657 7.4%	516 9.2%
しつけのしかたがわからない					3,318 8.9%	430 7.7%	2,698 7.5%	339 6.0%
子どもを好きになれない					121 0.3%	14 0.3%	160 0.4%	16 0.3%
気持ちに余裕をもって子ども に接することができない							8,433 23.5%	1,054 18.7%
子どもが保育所・幼稚園に行 きたがらない							891 2.5%	144 2.6%
その他	2,609 6.2%	161 3.2%	1,591 4.0%	134 2.9%	1,158 3.1%	117 2.1%	1,268 3.5%	147 2.6%
負担に思うことは特にない	1,009 20.2%	8,355 19.9%	4,728 12.0%	664 14.4%	4,753 12.8%	877 15.7%	4,213 11.7%	809 14.4%

X2乗検定による。+ p<01 *p<0.5 **p<0.01 ***p<0.001